

)))) 心に残したい話 (((((紹介

先日私が読んだ本で、みなさんにもぜひ紹介したい

話があります。「稲むらの火」のお話は有名で、昔は教科書に載っていました。でも、その息子さんのエピソードはあまり知られていず、私自身もつい最近知りました。



「稲むらの火」



一つの逸話をお話したいと思います。「稲むらの火」という話です。

江戸末期、和歌山県の広村というところに、濱口梧陵（はまぐちごりょう）という庄屋さんがいら



▲和歌山県広川町役場前にある
「稲むらの火広場」の銅像

っしゃいました。ある日、大きな地震が起きました。驚きながら海に目をやると、潮がさーっと引いていって、真っ黒い砂が現われるのが見えます。濱口さんは、「これは大きな津波が来る。村人たちを避難させなければならない」と考えました。しかし、時間に余裕はありません。そこで、自分の稲むら、つまり刈り取った稲を積み上げていたものに火をつけて、村人たちが登ってくるための目印にしようとしたのです。村人たちはその火を見て、「ああ、庄屋さんの家が火事だ」と思い、どんどん駆けつけてきます。そのあとに大きな津波がやってきて、村人たちは助かったという話です。

これは実話ですが、明治になってからこの話を聞いたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が、「A Living God」（生き神様）という題で、全世界にこの話を紹介しました。ですから、多くの国の人たちが知っています。

濱口梧陵さんには3人の子供がいらっしゃいました。一番下のお子さんは、学者で濱口担（になう）さんといいます。その濱口担先生が1903年、明治36年に、ロンドンのジャパン・ソサエティで講演をされました。講演の内容は日本の女性史でした。その勉強会にはたくさんのロンドンの女性たちが集まり、そして濱口さんの話を聴いたあと、質問時間になりました。たくさんの質問を受けたあと、最後に妙齢の婦人が1人手を挙げました。

「濱口さん、今日のお話と違う質問でもいいでしょうか。私は濱口という名に大変強い印象をもっております。なぜならば、あの『稲むらの火』の主人公が濱口だからです。あなたと『稲むらの火』の英雄の濱口さんとは同じ名前だけれども、関係がありますか。失礼な質問だったらお許してください。」

そのときのことを濱口担先生は手記に書いています。まさか自分の父親の話を遠くロンドンで聞くとは思わなかった。言葉につまってしまうと、目からぽたぽたと涙が落ちるのを止められなかった、と。その様子を見て、司会者が「どうしたのですか？」と尋ねます。濱口先生はようやくのこと、「いや、それは私の父親です」と答えたのです。そう言った途端に一瞬会場はしんとなって、そのあと全員が立ち上がってスタンディングオベーションになったのです。

<参考> 冊子『夢の幸う国へ』山田 宏